



TITLE:

アメリカ經濟管見

AUTHOR(S):

堀江, 保藏

---

CITATION:

堀江, 保藏. アメリカ經濟管見. 經濟論叢 1956, 77(1): 63-79

ISSUE DATE:

1956-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/132457>

RIGHT:

# 經濟論叢

第七十七卷 第一號

---

住民税の問題點……………	神戸正雄…	(1)
資本主義より勞働主義へ……………	作田莊一…	(14)
ケインズの一般理論について……………	柴田敬…	(33)
中國農業金融の蹤跡……………	徳永清行…	(44)
アメリカ經濟管見……………	堀江保藏…	(63)
ラダイツ批判……………	穂積文雄…	(80)
恐慌と地代……………	鶴嶋雪嶺…	(98)
ベンサムの功利主義體系……………	山下博…	(113)

---

[昭和三十一年一月]

京都大學經濟學會

# アメリカ經濟管見

堀江保藏

まえがき

今年の四月から六月まで丸三ヶ月間、私は國務省の招聘を受けて米國各地を旅行した。その主な目的の一つは、第二次大戰後とくに盛んになつた米國における日本研究の現状を見、日本研究者を訪問して、その目的・方法・材料などについて話し合うことであり、他は米國の大學に於ける教育のやり方、學生の勉強の仕方、大學の組織や設備などを見學することであつた。そのために私は、ワシントンを振出しに、フィラデルフィヤ、プリンストン、ニューヨーク、ボストン、バファロー、オバリン、アンナーバー、ソートレーキ、サンフランシスコ、ロスアンゼルス、アルバカーキー、それからテネシー州のノックスヴィル、そして最後に振出しのワシントンへ戻るといふ風に、米大陸を一往復し、その間、十六の大學を訪問した。その傍ら、商務省・農務省などの官廳、圖書館・博物館などの公共施設、銀行・會社・農場・鑛山なども見學し、ヨセミテ國立公園、グランドキャニオン國立公園の觀光もやり、アルバカーキーではインディアン部落を見ることもできた。その間、方々で晝食や夕食に家庭へ招かれ、また汽車や飛行機の中では、相手がどんな仕事をしている人かも知らずに話しかけたり話しかけられりして、豫

意外に得るところが多かつた。日本人には、歸化している人にも留學している人にも大抵の目的地で逢うことができた。これから申上げるのは、このようにして旅行した私の、米國經濟についての印象記である。

米國經濟の研究それ自身が目的ではなかつたし、一ヶ所の滞在期間の最も長かつたのがミシガン大學における九日で、あとは各地三日ないし一週間という風であつたから、私の觀察はすこぶる大ざつぱであり、表面的たるを免がれない。また招請されて旅行すると、とかく褒めがちになる傾向もあるようであるし、さらに貧しい家庭の多い南部諸州をほとんど見ていないのであるから、十分に割引きをして聞いていたくようお願いしたい。

## 一、貧富の差

米國の經濟について私が受けた第一の印象は、消費生活の實質部分において、大所得階層と小所得階層との隔たりが小さくなりつつあるということであつた。大多數の家庭が今日では自動車、電話、近代的な台所設備を持ち、テレビ・セットも相當に普及している。食事にしても非常な隔たりはなさそうである。自動車や電気冷蔵庫は勿論、多く使われる罐詰・冷凍品などの食事の材料は、いわゆるメーカー品であるから、金持が使う品と貧乏人が使う品とに違いがある筈はない。といつても、自動車などは、金持ちが毎年五千ドル以上も出して新車を買うところを、貧乏人は中古市場で三百ドル或いは五百ドルで買った車を何年も使うという風であるから、それだけの違いはある。日本から行つてゐる留學生でも少し節約すれば百ドルそこそこの中古品を買つて、通學やピクニックに間に合ふことができるのであるから、自動車を持つことは何も自慢にならぬかも知れぬが、それにしても、自動車が生活必需品として缺くことがでなくなつた米國において、貧乏人でも自動車が持てるということは、彼等の生活

の實質部分を金持のそれに近づけたものといわねばならない。

もちろん、金持は貧乏人と違つた生活をして居り、また違ふようにしているように見える。立派な家に住み、豪華な家具をならべ、上等のカーペットを敷き、また壁には名のある畫家の繪をかけるという風である。また大所得階層の貧乏人には近づきたい住宅地が方々にあるし、富豪が金を持ち寄つて、自分達の子供だけしか行けないような學校を建てるというようなこともやつてゐる。デトロイトの北西郊に克蘭ブルックという美しい地域があるが、そこにある幼稚園、小學校、中學校、および男子高校、女子高校はその一例で、私が參觀した女子高校は、一クラスの生徒數わずか七、八人、手藝室には手織機數臺を備えているという風で、全體としてさぶら豪華なものであつた。しかし、富豪の住宅についていうと、今世紀の初頭までしばしば見かけたといわれる宮殿まがいの大邸宅は、博物館になつたり研究所へ寄贈せられたりして、今日ではあまり見られないということであるし、現に私がバファローで見た富豪住宅街も、デラウェア・パークという宏大な公園の一隅に陣取つてはゐるけれども、近づきがたいという印象を與えなかつた。

以上のような次第で、貧富の懸隔は、少なくとも生活の實質部分に關する限り、小さくなつてゐる、もしくは小さくなる傾向があるといえよう。このことは都市の生活と邊鄙な農村もしくは山の奥の鑛山町との比較においても同様である。農村といつても日本の農村のような聚落形態のものは、今日では消滅してしまつたか、もしくは消滅途上であり、多くの農家はそれぞれ自分の農場に住居を持つていて、隣家へ行くにも自動車で、というような状態になつてゐるが、その家庭生活の様式は、極めて僻遠のものを別にすれば、町のそれと殆んど違わない。私はソートレیکی市の東方五十哩の地にあるメイフラワーという鉛鑛山を訪ね、鑛夫に家庭生活や子女の教育について質問

したが、家庭生活は町と違わないし、子供は、能力と意欲さえあれば、自分達でもカリッジへやつてやれる、と極めて卒直な返答を受けた。

こんな工合に多くの人が自動車を持つたり電話をつけたりすることができるのは、いうまでもなく所得水準が特に小所得者ほど高まつたからであるが（後述）、もう一つの理由は、大量生産の發達である。規格大量生産の大きなねらいは、誰でも持てる品物をというところにある、その大量生産の發達が所得水準の向上とからみあつて、貧乏人の生活を金持の生活に近づけているのである。

生活の實質部分において貧富の隔たりが小さくなりつつあるという觀察から氣がついたことは、マルキシズムにおける窮乏化理論が資本主義經濟に必然の法則であるのかどうなのかという疑問であつた。米國で共產主義が殆んど受入れられない理由には、それを全體主義と受取つて、米國人の個人的自由・獨立の精神と全く相容れないものと考えていることもあるが、もう一つの理由は貧富の差が小さくなりつつあることであつて、勞働者にプロレタリア意識が殆んどないという状態のところへは、共產主義は容易に入りこみ得ないものらしい。

ここで一言、米國人の生活哲學といつたものについて私が觀察したところを申上げると、それは要するに「Make more money, and spend more money!」というに盡きる。金を使う機會が多いことはいうまでもないが、彼等が勤勉でありまた能力があれば、所得を増大する機會もまた多いように見受けられた。「金を使う」(spend)ということは、しかしながら、「浪費する」(waste)の意味ではない。米國から來る觀光客の財布の紐がかたいということをしばしば聞かされるが、米國人の金の使い方から見て、容易にうなずける事柄である。要するに無駄金を使わないように子供のときからしつけられ、またそれに徹底しているようである。ブランドキャニオンを見物に行つた

とき、觀光バスの乗車券がレモン・ジュースのサーヴィス附きになつてゐるのをうつかり見落してゐて、途中の休憩所一杯のんで十五セントを拂つた。ところが同車してゐた一紳士が、君は十五セントを失つたといつて注意してくれたことを思い出す。

普通のレストランでは酒を賣つてゐないことも、無駄使いができない仕組みと受取れるし、それよりも、宴會でも家庭の食事でも、いざ食卓につけば酒が出ないのが普通である。酒は食事の前に立ちのみにして置くだけで、食卓の飲み物は水とコーヒまたは紅茶だけである。酒を飲みたければバーへ行け、というわけである。

では儲けた金はどういう風に使うかという点、まず生活の改善向上に向ける、次に貯蓄をして旅行その他の費用にあてる、また公共の施設に寄附をする、といった工合である。ことに公共施設への寄附は、歐羅巴でも同様であるし、米國でも今に始まつたことではないが、とに角、どの大學へ行つて見ても、寄附者の名前のついた建物や圖書館の多いのに驚かされる。私立大學の中にはスタンフォードのように個人の寄附で出来たものもあり、アマースト・カリッジのように地域社會全體の寄附でできたものもあるが、州立・私立を問はず、そのできた大學へまた誰かがある建物を寄附するという工合にして大きくなつた場合が多い。大學ばかりではない、圖書館・博物館・教會などもその通りで、殊に建築中の教會はいたるところに見られるが、これはいわゆる貧者の一燈を積累せる場合が多いという風に聞いた。

このような金の使い方は、家計の計畫化というか、消費生活の合理化というか、そういうことと無關係ではないように思われる。一方において金をよく使うが、他方において勤儉である。消費はするが同時に貯蓄もする。消費と貯蓄、從つて投資が均衡を保ちつつ擴大するといへば、あるいは誇張のきらいがあるが、とにかく、生産が消費

を生み出し、消費が生産を促進しているところに、今日の米國經濟繁榮の基礎があると思われるので、次にそのことを一言したい。

## 二、生産と消費

昨今米國の好景氣がやや頭打ちの様相を呈して來たので、それが下り坂に向うのか、それとも横這いの狀態で持續するか、色々取り沙汰せられているが、私が旅行していた四月から六月にかけての時期は非常な好況期であつた。東部から西部へまわつてサンフランシスコへ出たのは、大學の卒業式を間近に控えた五月の終り、六月の初めであつたが、土地の新聞を見ると、卒業生は羽が生えたように賣れて行く、このような時期に就職する者はとかくイーजी・ゴーイングになりがちであるが、こんなよい時期が續くわけのものではないから、諸君は心して進まねばならぬ、という意味の長い警告文が載つていた。カリフォルニアは全米中で最も經濟活動の活潑な、生長率の高い州であるから、この州の狀態をそのまま全米國に推し及ぼすことはできないが、それにしても、米國の景氣について、少くとも一九二九年のような恐慌が再び起るだろうと豫想する人が非常に少ないことは、興味ある事柄である。景氣の指標としてよく自動車の生産が擧げられるが、昨年の生産臺數は前古未曾有で、會社の收益もフォード二億ドル、ゼネラルモーターズ六億ドル、合せて八億ドルということであつた。今年はそれを上廻るだろうといわれている。住宅建築も頗る旺盛で、それは單に戦時中の建築不足をカヴァーするだけでなく、都市内の住宅を郊外へ移すこともある。パファローその他で、都心に近い住宅が續々店舗に變り、住宅地は郊外へ急速に伸びつつある狀態を眼のあたりに見た。これはいうまでもなく自動車のお蔭である。従つて、シュニーパー・マーケット



トの如きも、郊外住宅地にあるものの方が、都心にあるものよりも立派だという印象をうけた。もしそれ人口増加に應じた住宅建築ということを考慮に入れると、住宅需要が持続的に景氣を支える重要な支柱となるであろうことは容易に推察せられる。家具・合所設備・テレビセットなどの耐久的消費財の需要も旺盛であつた。

かくて、生産財の面でも、例えば鐵鋼業では設備の稼働率は九六パーセントに達し、これ以上の需要増加に答へようとするれば、設備の新設・擴張を必要とするといわれていた。一般に生産設備への投資は相當進んだらしく、今日、米國の景氣は、消費景氣から投資景氣へ進んだといつてゐる人もある。

いづれにしても、景氣を支えているものは消費需要であるが、消費需要を増加させるものは所得の増加に外ならない。米國で、所得の増加が小所得者ほど厚いというのが近時の傾向であることは、よく云われるところであるが、例えば一九四一年に年收三千ドル以上の消費單位 (spending unit) (獨身世帯を含む) が總世帯の中で占める割合は二五パーセントに過ぎなかつたものが、四九年には四七パーセントに増加してゐる。

これに關連して注意すべきは、家計の計畫化である。米國人の旅行好きは周知のところであるが、その旅行は計畫的に行われるのが常であつて、例えば三年後には家族づれでグランドキャニオンへ行くことにしてゐる、というようなことを云つてゐる人にしばしば出會つた。TVAのあるノックスヴィルにいたとき、「地獄門」の話をしたら、九月にはそれが来るから見ることにしてゐるという人に出會つたが、映畫を見るのにも、何月には何をとという風に、豫告を見て考へてゐる人が多いらしい。

家計の合理化・計畫化についていえば、コミュニティーにおける話し合ひも何がしの役目をしてゐるようである。米國を旅行していると、コミュニティーという言葉をしばしば聞く。それにはいろいろの意味があるが、こゝで一

言したいのは、地域的な住民の自治的な小グループで、月に一回とか二回とかの定例集會で、子供の育て方、家計の切盛りの仕方などが話し合われる。教會を建てたり校舎の増築をしたりする場合の寄附金のこと話合われる。政治季節には黨や候補者について討論が行われる。恐らく植民地時代に、政府による保護、秩序の維持、ないし建設・開發が當てにならぬ状態の下において、自然的に發生したものであろうが、それが今日にまで生きていて、家庭生活、社會生活の向上に大きな役目を果しているようである。というよりも、米國デモクラシーの基礎構造であり、世論の形成もまた多くそこで行われると見てよい。とまでいうと、云い過ぎかも知れないが、とに角、コミュニティの會合が家計の合理化・計畫化の一助となつてゐることは間違いないと思われる。

さらにその計畫化を促進しているもう一つ重要なものがある。それは賦拂制度 (Installment plan) である。家具を買う、月賦、着物を作る、月賦、自動車を買う、月賦、家を建てる、月賦という風で、長いには十五年、二十年というのものもある。ノックスヴィルでいつしよになつた南米からの旅行者は、パーキング・ブレース以外はみな月賦買いだと冗談をいつていたが、それはど月賦販賣が盛んで、消費者信用の四分の三を占めてゐるという數字も出ている。従つて、年々の賦拂信用の新規供與額が、その期間の返済額を上廻つてゐると、それだけ消費財の賣行きが増加して行くことを示し、下廻ればデフレ要因になるわけであるから、賦拂制度は景氣の動向を知るための一つの重要な項目となるわけであるが、それにしても、月賦買における食逃げのケースが殆んどないことと併せ考へて、この制度の發達が家計の合理化を促進していることは疑えないであらう。

家計の計畫化は所得がそこそこ以上でなければ成り立たないが、多くの家計が大なり小なり計畫的なれば、消費は恒常的になり、また政策面から見ても、打つ手が容易に下部まで浸透する。このこともまた今日の米國の經濟

を見る上に重要であらう。

消費維持の側面を持つ政策には、失業保険と養老年金を主たる内容とする社會保障制度があり、玉蜀黍・小麦・棉花・煙草の四大農作物に對する支持價格制度も、一面において、消費政策であるといえる。しかし米國では、國家の政策より前に、企業自身が、いかにして消費を持続させるか、進んで消費を創り出すかに苦心しているように見える。勞働者に對する分け前を多くするという考え方はその一つである。規格大量生産によつて良品を廉價で賣りこもうという考え方はその二である。この二つの考え方に従つて生産を始めた典型的な企業家がフォードであることは周知の事實であるが、新技術・新製品がしきりに出現して、企業間の競争がいよいよ激しくなつた今日では、いかにして消費を創り出すかにすべての企業が全力を注いでいるかに見える。かくて、販賣過程におけるサーヴィスが行届いて来る。月賦販賣の發達もそのサーヴィスの一つと見てよいが、特に耐久消費財については、セールズマンに技術者を用い、アフターケヤーまでやらせるなどのことも、サーヴィスの徹底を示すものといつてよい。商品に値札をつけてショウウインドーに並べるだけでは、まだ「財」(Goods)であつて「商品」(merchandise)とはいへぬ、というようなことがいわれているが、企業の競争ぶりやサーヴィスぶりを見ると、どうもその通りらしい。

しかしながら、企業が消費のことを考えるのは、あくまで生産の立場からである。政府の考え方も同様である。勞働者も、方々で出會つたCIOの役員が、自分達は企業に協力していると言明しているように、自分達の分け前を大きくするためには企業の収益力の増大が前提であるとして、生産性の向上を拒否しようとはしていない。消費經濟學が頗る盛んなことは周知のところであるが、ここでも考え方は社會政策學的・分配的ではなく、あくまで經濟學的・生産論的である。

かくて、米國の生産の高度化は諸外國に對して脅威となり、なかんづく、ドル不足をかこたしめる重要な原因となりつつあるが、それにお構いなくオートメーションへの巨歩をすすめつつあるのが、米國の生産の現況である。

### 三、巨大な機械

というよりも、米國の經濟について私が受けた他の大きな印象の一つは、今日の米國は、經濟ばかりでなく、政治も教育も宗教も、すなわちあらゆる生活部面を含めて、あたかも一個の巨大な機械になつてゐるのではないか、ということであつた。その巨大な機械は晝夜の別なく運行してゐる、こういう印象を受けたのである。その機械の中心部というか、運行の動力というか、それは要するに、オートメーションの進んだ大工業、非常によく組織された金融、高度に發達した交通・通信機關、この三つである。

大工場で私が見學したのはデトロイトのフォード工場だけであるが、そこは全フォードの親工場で、製鐵工場から、部品の鍛鑄造工場、ガラス工場、組立工場まであつて、オートメーションは單に組立工場だけでなく、製鐵工場にまで及んでいる。このような例は色々の書物にかかれて居り、このような大工業が米國經濟の中心になつてゐることは、事新らしく述べるまでもない。

金融についても説明を要しないと思うが、重要な點を列擧すると、一、企業に對する銀行信用の供與は殆んど運轉資金に限られ、企業は設備資金を概ね自己資本に依存してゐること、従つて、金融機關の産業支配の度が小さいこと、二、銀行は庶民の消費資金の融通もやつてゐること、三、金貸し (financial company) が銀行と連絡をとり、系列化が行われていること、四、賦拂制度が非常に發達してゐることなどである。

以上三つの中心を動力として運行している米國という巨大機械の中で、小企業はどんな地位にあるかを考えることは興味深い事柄である。結論から先にすれば、町工場も小賣商も農場も、今日では巨大機械の部分品ないし構成要素として、大企業と歩調を一にし、同一方面へ動いている、そしてそうでなければやつて行けないような状態になつてゐるらしい。私がこんなことを感じたのは、バファード Rich Dairy Corporation というバタークリーム製造工場を見たときである。同市のエリー湖岸に近いところに小工場が軒をならべた地區がある。日本の中小企業問題を考える上に何か参考になりはしないかというので見せてもらったのが、その工場であつた。従業員は男子七人、女子七人で計十四人、うち製造作業に直接たずさわつてゐるのは男子二人と女子七人で、しかもその製品はほとんど全米各地へ行互つてゐる。それは作業工程が完全に機械化してゐるからであつて、恰も規模を極度に小さくしたビール工場を見てゐる心地がした。通信用にはテレタイプを使つてゐる、研究所が新築中であるといつた工場で、これでは、日本の中小企業の参考にするには少し距離がありすぎると思ひながら辭去した次第である。

同じようなことはオバリン・カリッジの近郊や、ミシガン大學のあるアンナーバーの近郊で農場を見學した際にも感じた。アンナーバーではミシガン大學のリーマー教授に案内して貰つて、近郊の農家を見學したのであるが、そこは親父と長男が百二十エーカー、二男が獨立して百二十エーカー、三男がまた獨立して百二十エーカー、娘婿が別に二百二十エーカーを耕作してゐた。農場や納屋ばかりでなく住居の隅々まで見せて貰つたのは、親父のところと牧畜に重點を置いてゐる次男のところとであるが、耕耘はもちろんサイレージ・カッチンクから搾乳に至るまですべて機械化してゐて、大抵の仕事は男がやる、二男の妻君の如きはマニキュアまでやつてゐて、町の人と違わない恰好をしてゐるという状態であつた。今日米國の農場は約六百萬といわれているが、そこにトラクターの臺

數は約四百六十萬臺、それも五年前に三百八十萬臺であつたことから見ると、トラクターの普及が近年いかに急速であるかがわかる。

普通に米國は大企業の國という風にいわれているが、小企業は意外に多い。製造業についていうと工場總數の六五％は従業員二十名以下の小工場であり、卸賣業では六九％までが従業員五名以下という小規模、小賣業に至つては従業員二名以下のものが七六％を占めている。農業においても、一時増加の傾向を辿つていた小作は一九三〇年以後漸次減少し、自作農が増加の傾向を辿つているが、小作農であれ自作農であれ、その大部分は自家労働に依存して居り、そこに上述のように機械化が急速に進みつつあるのである。

このようにして、機械化された大企業を中心にして、數においては壓倒的に多い小企業も大企業とペースを併せん動いているのが米國の狀態である。何もかも早い。ロスアンゼルスで洗濯屋のおかみにつかまつて、この話をしたとき、そのおかみは *Everything goes fast, fast, fast!* と叫んで、こんな早い狀態は好ましくないという意味のことをいつていたが、實際、米國のように機械化が進み、全體が一個の巨大機械となつて運行するという風になると、人間自身も質はその機械の部分品となり、その性質まで變るのではないかとさえ思われた。あちこちで乞食や狂人に出逢つたが、これは恐らく巨大機械の運行から落伍した人々であろう。そうでなくとも、ある意味で人間性の喪失ということも起つて来る。

米國には、例の「暴力教室」に出て来るような無頼の徒も澤山いる。しかし他面、他人に對して疑つてかからないというのが一般の狀態である。例えば繪はがきを買つても、大抵の所ではこちらが數えた枚數をそのまま信用してくれるし、キーパーのいない新聞賣場もあちこちにある。小切手を送るにしても書留にしないのが普通である。

また米國人は他人のことをあまり氣にやまないように見える。どんな着物を着ていようが、何を食べていようが、他人は他人、自分は自分というわけで、一向氣に病む風が見えない。また私は汽車に乗つても飛行機に乗つても、隣席の人に成るべく話しかけて耳ならし口ならしに利用したが、それを嫌がられたことはない。それどころか、自分の身の上話をしてやろうかという奇得な御仁さえあつた。家庭を訪問した折には台所まで見せて貰うのを常としたが、そんなときには、大抵の場合、冷蔵庫の扉まであけて見せてくれた。そんなわけで、米國は混合人種の國であるから、はだの色が少々違つていても差支えないということもあるが、とに角、氣樂に旅行できる國である。

そのように、他人を疑つてかららないとか他人のことを氣に病まないとか、いうような氣質は、徹底した個人主義を表わすものであり、また宗教的情操教育の結果であるかも知れないが、先程の巨大機械ということに關わらせて考へて見ると、機械の部分品になつてしまうと、どうもこのような氣質が一そう強くなるらしい。放つて置けば味もソツ氣もない人間になるんじゃないか、と他人事ながら氣に病む日本人もあるらしい。

しかし米國人もやはり人間であるから、無感覺な機械の部分品になろうとはしない。どうして機械から脱け出すかをよく知つているようだし、意識的・無意識的に人間性の回復に努めているかに見える。第一、彼等は執務時間と家庭時間とを巧みに使いわけける。會社へ行つて見ても銀行を訪ねて見ても仕事の時間はカッキリしているし、執務中はあたかも部分品のように働くが、その代り家庭時間は徹底的にエンジンするという風である。面會の時刻および時間とはつきりしているし、町の商店も午後五時半とか六時とかの閉店時刻をキツチリ守つてゐる。第二、彼等は音楽、スポーツ、繪畫、ピクニック、旅行などのリクリエーションが非常に好きである。シャレや冗談がすきである。第三に手仕事が好きだ。家具屋にはヘーン・メードの家具が賣つてあるが、彼等はそれを買つて歸つて、

部屋に似合う色を塗つて仕上げるというようなことをする。板その他の材料を買つて來て、初めからこしらえるものもある。私はオバリン滞在中に、地下室でボートをこしらえている人に逢つた。でき上れば自動車の屋根に積んで、エリー湖へでも持つて行つて水遊びをしようというのである。第四に、米國人の好みは案外に地味である。なるほど婦人達は帽子、イヤリング、ネックレスと、けばけばしいアクセサリーを着けているが、着物の色や柄はむしろ地味であり、型もむしろ單純である。私は土産に京洛風景の版畫を持つて行つた。そして進呈するときにはあるだけ並べて好きなものを取つて貰うようにしたが、地味なのから順次無くなつて行くのを見て、成るほどと思つた。戦後、日本品を含めて東洋の品物がよく賣れるが、それには珍奇ということもあるけれども、東洋風の地味な味がたまたま米國人の好みの一面である地味な好みに合致した、ということもあるのではなからうか。

#### 四、對外政策の基調

米國人に自主獨立の精神が旺盛であることはよく聞くとこゝろであるが、旅行をして見て、それが一そうはつきりした。他人のことをあまり氣に病まないのも、個人企業が案外に多いのも、その現われであらうし、社會保障費は特別税により、それ以外に政府は負擔しない、つまり慈善的要素がない、というのも、同様の考え方に基くのであらう。アルバイト學生についても同じことを感じさせられた。學生のアルバイトは非常に盛んで、ことにオバリンやアンナーバーのような大學町では、レストランその他多少ともに人手を要する店々が殆んどパートタイムのアルバイト學生（彼等は講義時間のあい間を縫うて働くのが普通である）を傭っている状態で、もし日本であればと學生が進出したなら、固有の使用人は悲鳴をあげるだらうと思つたほどであるが、それでは米國の大學生の多くがそれ



ほど貧困學生なのかというと、そうではなくて、年頃になつた以上、親から學資を丸々出して貰うのを潔しとしないという氣概が自然アルバイトに向わせるのだということであつた。

この點で面白く思つたのは、ブランドキャニオンへ行く途中で知り合いになつたサルヴェイ氏の身の上話である。父がミシガン州のナイルスで男物の小賣商を營んで居り、自分はハイスクールを出るとすぐ父の店に勤めた、二十三歳になつたとき、父は店の財産の三分の一を一萬五千ドルで自分に賣つてくれた、即金で買うわけにはいかなかった、自分の給料と三分の一の財産の収益とから年四分の利子をつけてその代金を年賦で拂い、三分の一の財産を完全に自分の持分にした、弟が二十二歳になつたとき、父は弟に對した同じ仕方で財産を賣つた、いまでは妹婦も加えて一族で七つの店舗を經營している、という話なのである。このようなことは決して例外ではないのであつて、一人前になるまでは何とかするが、あとは自力でやれというのが、米國人の普通の子供の育て方らしい。

單に個人の場合だけでなく、學會のような團體の場合にも、國際關係においても、米國人は同じ考え方をしているようである。自力でやれ、獨り歩きがでるところまで、あるいは獨り立ちがでるように、手助けはせぬでもないが、それから先は自分で立ち自分で歩け、というのであつて、これが對外政策の第一の基調であるように思われる。今日、後進諸國とくに東南アジアへの開發援助が、かけ聲ほどに強力でなく、むしろ手緩いという感じを與えているのは、金持ちに多くのものを要求し期待しがちなわれわれの考え方と米國人の考え方とに違いがあるからではなからうか。もちろんそこには、後進國側に政治的にも經濟的にも投資の不安があり、これに對して米國自身國內にまだまだ投資の機會が多いという事情がある。投資の不安についていえば、日本なども、形は一つだが實質は一つなのか二つなのか、疑念をもつて見ている人もあつた。

とはいえ、後進諸國とくに東南アジア諸國の經濟開發ないし近代化に米國人が多大の關心を持つてゐることは事實であつて、戦後にわかに日本研究が盛んになつた原因の一半は、そこにあると思う。旅行中に、學者・官吏・實業家などから私がうけた共通の質問は『十九世紀の中頃、歐米の近代文化に接したアジア諸國の中から、何故、あるいはいかにして、日本が獨り速やかに近代化したか』ということであつたが、その意圖は要するに、日本の經驗を學んで後進地域の近代化に資したいというにある。

それではなぜ米國人が後進地域の開發に關心を持つのかというと、商品や資本のマーケットを創るということもあるが、それよりも米國のエキスパンジョニズム(expansionism)の然らしめるところと見る方が重要ではなからうか。これが米國の對外政策の第二の基調であると私は見るのである。米國人は何でも『世界第一』を誇りとする。ニューヨーク市のエンパイヤーステート・ビルが世界最高の建物であることはいうまでもないが、觀光バスのガイドは、クライスラー・ビルを指差して『the second highest building in the world』という風に説明する。直譯すれば妙な言葉になるが、表現は面白い。同様にどんな小さな町へ行つても、その住民はその町を米國で一番よい町だと思ひこまねば安心がでないらしい。こんな次第で、米國人は、米國の文化、米國の政治・經濟組織、米國人的な物の考え方、その他なんでも米國のものが世界で一番よいと考へてゐる、少くとも考へようとしてゐる。それをできるだけ廣く世界に及ぼしたいというのがいわゆるエキスパンジョニズムであつて、しかもそれには實力が伴つてゐる。植民地から獨立した經驗を持つてゐるし、いまさら植民地を持つなどは通用しないことであるから、米國が植民帝國を築こうとしてゐると思われぬが、エキスパンジョニズムには強烈なものがあるように見える。考へて見れば、ロシアにも同じようなエキスパンジョニズムがある。ロシアのシベリヤ進出以來の歴史を回顧し

でも、今日の政策を見ても、それが頗る強烈であることが知られる。ロヤシと米國とこの二大國の強烈なエキスパンションイズムが衝突しているのが世界史の現段階であり、日本などはその『谷間』にあるといえるのではないかとつくづく感じた次第である。

## むすび

以上申上げたことは極めて大ざっぱであるが、旅行の印象記である故を以てお許しを願うとして、話にしめ括りをつけるならば、それは要するに、米國を甘く見てはいけないということである。甘く見るということの内容の第一は、米國の資本主義は資本による獨占が益々進んで、マルキシズムの崩壊理論通りにやがて崩壊するだろう、というような甘い見方であり、第二は、米國は金持ちだから、何か慈善的・救済的なことをしてくれるだろう、というような安易な考え方である。後の點は、米國との關係においては、外の國との關係においても同様であるが、あくまでギヴ・エント・テークを基調としなければならぬ、ということである。

ワシントンから歸途の機上でタイムか何かの頁をくつていると、目についたのはソ連首腦のユーゴー訪問記事であつた。ブルガーニンが『中立』を提言したのに對し、テイラーは『中立よりもまず獨立』と答えている。この言葉をしみじし味わいながら、私は日本へ歸つて來た。

(附記) 本稿は、一九五五年十一月二十五日、京大經濟學會大會における講演原稿に補筆したものである。